
電腦探偵ファントムペイン

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電腦探偵ファントムペイン

【Nコード】

N2938Y

【作者名】

うな

【あらすじ】

オンラインゲームM・E。そこで一人のアバターがPKされていた。探偵職の主人公「ファントムペイン」は有り得ないPKの謎に迫る。

『目が醒めるような蒼』。そう形容できる姿で被害者は死んでいた。

地面に伏した被害者の身体はペンキでも塗りたくったかのように青一色で、身ぐるみを剥がされた男の筋骨隆々の裸体はSF映画の『アバター』のようだ。

「……非戦闘域での戦闘不能者。それも所持品はゼロときた。こりや間違はなくPKだプレイヤーキラーな。どうせやるならもっと上手にやれよな……」
FMDを装着した男がクーラーのガンガン効いた部屋で、椅子に座ってぶつぶつぶやいている。彼の名前は五十嵐龍平。オンラインゲームを好む独身男である。

今、彼の目の周りをすっぽりと覆っているFMDの画面に映っているのはオンラインゲームのプレイ画面で、龍平は最近何かと話題の『モデル(M)・エレメント(E)』にログインしているのだった。

「青属性——氷や水の攻撃で殺されたか。PK対策の為とはいえ、こりや酷い死に様だな」
アバター

画面の中。龍平の分身であるファントムペインは被害者の身体をぺたぺた触りながら、どんな経緯でこの男が殺されなければならなかったのかを考え始めた。

今彼らがいるのは非戦闘域である、街から村への遊歩道。つまり、モンスターに襲われたわけではない。ここに入ることができるのはプレイヤーが操るアバターだけで、つまりそれは『プレイヤーがプレイヤーを殺害すること』。PKがこの場所で行われたことを意味していた。

「あー……ツール、ツールっと」

龍平がコントローラーを操作すると、画面の中のファントムペインの手に青白く光る虫眼鏡が忽然と現れた。探偵であるファントム

ペインの商売道具である。その虫眼鏡を青い死体に向けると、右上のステータスウィンドウにそのアバターのステータスが表示された。探偵のみが行える強制的情報開示だ。

HNⅡ アルビレオ

クラスⅡ 剣士

LevelⅡ 92

属性Ⅱ 赤

所属Ⅱ スリーピングシープ

「はあっ!？」

真夜中であることにも構わず、龍平は大声を上げた。だが、それも仕方ないことだ。今、画面の中で青くなつて死んでいるのはMEのプレイヤーでは知らぬ者などいない有名なものだから。

「アルビレオつて……あの『法の剣』のアルビレオか？」

法の剣／奪還屋／PKKKK／プレイヤーキラーキラーキング神速の貴公子——その全てが彼を表す通り名である。

PKKのアルビレオ。MEからPKを根絶やしにしたとまで言われる男。多くの信者とそれよりも多くの敵を持つ、血に汚れた英雄。それが今、目の前で身ぐるみを剥がされて死んでいる。

「敵はいくらでもいただろうが……まさか、こんな死に方するなんてな……」

龍平はあまりの事態に盛大に溜息を漏らした。

『よりリアルに!』をモットーにするMEにおいてはPKは決して禁止行為とはされておらず、むしろ古参のプレイヤーたちは推奨した。PKに遭うとそのアバターは消滅し、それまでかけた膨大な時間は無に還る。しかし、そのスリルがたまらないとのことだった。あくまで古参のヘヴィユーザーは。

問題は新参者たちだった。某人気アイドルグループがMEにハマっているというウワサを聞きつけ「お近づきになれるかも!」とM

Eを始めたとされるライトユーザーの一団はこのPKシステムに大いに怒った。

「なんで私を殺すの!？」 「人殺し！」 「賠償金払いなさいよ!！」……そんな具合に。

そこに現れたのが後に法の剣と称されることになるアルビレオである。ME屈指の傭兵集団スリーピングシープの団長にして、最古参のプレイヤーである彼はPKに対する無差別攻撃を宣言し、実行した。アルビレオ個人になら兎も角、団員数1000を優に超える古強者の集団を敵にまわす勇気のあるものは存在せず、それ以来MEの世界観は完全に変わった。PKは他人の人格を否定する行為であり、それを行うものは一切の例外なく裁かれるべきという法が敷かれた。ヘヴィユーザーはほぼ例外なく怒りを覚えたが、彼らに抵抗する力を持った者は誰もいなかった——その、はずだ。

「……すげえな。こりゃ、大事件だぞ」

そんな時の権力者がこんな遊歩道で死んでいる。こともあるうにPKKの総大将がキルされたのだ。

アバターが消滅していないところを見ると、まだ殺されてから10時間経っていないのだろう。もしかすると、まだこの辺りに犯人が潜んでいるかもしれない……。

「ははっ、俺まで殺されるかもな……」

ファントムペインLevel74。レベルの上限が100であるMEでは充分に高レベルであると言えたが、そもそも戦闘職でない彼がアルビレオほどの手練を殺害した相手に抵抗できるはずがない。普通であれば尻尾を巻いて逃げる場面だ。

加速度的に必要な経験値が上昇するMEでは、レベル70になるのに寄生プレイヤーですら1000時間は下らない。探偵職という経験値的な側面から見れば全く旨みのないファントムペインはその数倍は時間がかかっている。なにより、経験値は時間で解決できるかもしれないが数万分の一の確率で手に入れたレアアイテムは二度と手に入らないであろう。普通ならば逃げる場面なのだ……PKを肯定

するMEの古参プレイヤーでもなければ。

「面白いじゃないか……。俺が求めていたのはこういうスリルなんだよっ」

龍平「PKが跋扈したベータ版からの古参プレイヤー／戦闘力が最低クラスの探偵職を自らの分身とする理由」PKのスリルを最大限に味わうため／根っからの変人「かつての使用していたアサシンのアバターはアルビレオのPKK宣言を完全に無視し、抹殺されるまでPKを続けた。

「……殺されたってかまやしない。アルビレオを殺った野郎の顔さえ拝めれば、それでいい」

かつてのPKの血が騒いだ。こんなとんでもないことをやらかった同族を一目見たいと願い——同時に、キルしてやりたいと獐猛な本性が告げていた。

捜査開始——死因の特定。

MEの特徴の一つ「PK対策の属性色の固着。殺害されたアバターの身体に攻撃された属性を刻み付ける仕様。MEでは一つのアバターにつき一つの属性しか存在せず、青属性は青、赤属性は赤といったように己の属性以外の攻撃を放つことができない。それは敵モンスターにも言えることで、この属性固着の仕様も、今は専らPK探しの要素として注目されているが、元々は強力なボスモンスターによって殺されたアバターが次の冒険者の道しるべとなるようにと実装されたものだった。モンスター戦で死亡した場合、レベル所持品はそのままだがアバターは10時間の間使用不可となり、死亡場所に野ざらしにされるのだ。

「見たまんま青属性か。全体に偏りなく青く染まってるから誤認の

余地なしだな。たぶん斬撃の類じゃなく魔法……普通に考えりゃ水の魔法だろうが……」

アルビレオの死体は初心者殺しの異名を持つ青属性モンスター『リヴァイアサン』によって大量生産される水死体とよく似ていた。全身に水の魔法を受けて死んだアバターはアルビレオのように体中を青色に染めた酷たらしい死体となるのだ。

「こんな見晴らしのいい場所で魔法使いが魔法防壁持ちの剣士相手に勝てるわけがない。足止めの前衛がいなけりゃ防壁削り取る前に斬り殺されるのがオチだ。ということは複数犯……最低でもLevel 170以上の魔法使いと剣士、あるいは近接戦闘最強の騎士が必要だな」

アルビレオの殺害風景をシミュレートする。

何も知らずに遊歩道を歩いて来るアルビレオに襲いかかる前衛のPK。即応するアルビレオ。二者から離れた位置から魔法を詠唱する後衛のPK。後衛は初撃でアルビレオの魔法防壁を無効化する魔法を放ち、前衛が倒れる前に力天使級の大魔法によって前衛ごとアルビレオを亡き者にする。

普通に考えればアルビレオのHPを魔法一撃で削り切ることは難しいだろうが、青属性はアルビレオの赤属性に対しては優位に働く。前衛が与えたダメージと合わせて計算上は実現可能なプランだ。

「まあ……アルビレオほどのプレイヤーだと普通は弱点になる青属性のダメージを軽減する装備を付けてるだろうから、PKどもが二人つて線は薄いかな。少なくとも三人……多くて五人つてとこか？」

装備の効果を加味してさらにシミュレートする。

検索ウィンドウを開いて情報収集——ME内の匿名掲示板によれば、アルビレオのテンプレート防具によって発現する特殊効果は全状態異常無効＋青属性軽減50％＋魔法防壁強化＋狙撃無効。アルビレオのキルを狙うPK達の間では常識と化し、けれど未だ攻略に至らない鉄壁の対PK装備。

強化された魔法防壁は削りとるのに三回の解除魔法を必要とし、

弱点を半減することにより耐久力が飛躍的に上がる。また、状態異常にしてハメ殺すこともできず、ちんたらしていたら逆に斬り殺されてしまう。剣士はクラス的に見ると、騎士よりも攻撃力に劣るが、アルビレオの場合は超レア武器『レヴァンティン』によって武装している為に、その限りではないのだ。

「自動回復じゃなく狙撃無効にしてるあたり、本気でPK対策装備だな……。普通のプレイヤーなら利便性を選んで、勝手にHPが回復する自動回復を選ぶもんだが……」

あまりに徹底的なPK対策に「こいつも昔PKしてたんだろうなあ」と思いながら龍平ことファントムペインはアルビレオを殺した誰かがつくづくとんでもないことをしてかしたのだと耐え難い怒りを感じた(……………)

はつきり言ってPK対策に本気になった高レベルアバターを殺すことはほぼ不可能なのだ。能力値や装備の問題以上に、PKに適した場所に足を踏み入れない。行く場合は複数人の仲間を従えて行く。殺しの機会など与えはしない。現に今いる遊歩道だってPKに向いているとは御世辞にも言いがたく、アルビレオならばPKどもを巻いてログアウトできるのではないだろうか。

凶悪なハッカーと優秀なSEが表裏一体であるように、PKとPKも同じものの別側面なのかもしれない。そんなことを思いながら、しかし、アルビレオ殺害は可能であると最低の結論に思い至り、龍平は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「……これは『ゲーム』だ。正攻法で通じないなら裏技を使えばいい」

ぎりつと歯を噛み締める音。もはや龍平の中に先程までの高揚感とはなかった。その可能性に気づいてしまった瞬間、アルビレオを殺した偉大な暗殺者は最低最悪の畜生へと変貌を遂げた。

違法行為^{チート}。運営者によって禁止された、真正正銘の規則違反。システムに細工してしまえばどれだけレベルが高かろうと装備が強かろうとプレイヤーが注意深かろうと関係ない。赤子同然になぶり殺

されるだけ。だから、それは本当にプレイヤーの人格とゲームへかける情熱を否定する行為なのだ。

「さて……どうしてくれようか」

まだチートが行われたという確証はない。しかし、元PKとしての勘がこれは真つ当なキルではないと告げていた。

あまりにあからさま過ぎるPK——非戦闘域での殺害／装備品の一切合切を強奪する図々しさ／属性色の固着に頓着しない雑な攻撃。これら全てがアルビレオを仕留めうる辣腕のPK象を否定していた。

「悪いな……どっかの誰かさん。敵の敵だからって味方になれるほど単純にできてないんだわ」

龍平は一旦ログアウトし、ME内のBBSにスレッドを立てた。

【アルビレオがチートで殺された！】——死体とステータスウインドウ付きのスクリーンショットを貼りつけ＋状況の不可解さの説明文章〓チート野郎を囲い込む、包囲網を敷くための手段。

報告——『レヴァンティン』を得意げに振り回す青属性のアバターの目撃情報

報告——『レヴァンティン』アバターを8／12の祭会場で発見

報告——『レヴァンティン』アバターの捕獲

報告——『スリーピングシープ』構成員による『レヴァンティン』アバターの殺害

報告——犯人：HN〓ハデス

クラス〓魔法使い

Level〓24

属性〓青

所属〃なし

推測——チートアイテムによる違法PK。運営は体面のためにアルビレオの報告を無視した

疑問——何故アルビレオ自身が掲示板に書き込まなかったのか。運営も流石にそこまでバカじゃなくね？　そもそもチートアイテムはどこから手に入れた？

展望——チートアイテム保有者の狩りの始まり。闇の奥で手を引いていた者を引きずり出すためにスリーピングシープが団結。付随してPKKの廃止

「ブログの更新もなし、か……。ご自慢のアバターをキルされてよほどご憔悴みたいだな」

FMDを外し、通常のパソコンモニターでアルビレオのブログを閲覧しながら龍平は呟いた。時間はもう5時。寝るに寝られず、かと言ってハードな作業をする気力も湧かず。弔う気持ちなど微塵もなかったが、なんとなく被害者のブログを見ていた。どうやらあまり筆まめな性格ではないようで、何ヶ月かに一回しか更新されておらず内容も対して面白くない。だが、ME効果なのかコメントは無闇矢鱈に多かった。もしかするとこいつが件のアイドルグループの誰かなんじゃないか、なんてバカげた妄想が湧いてくるが流石にそれはないだろう。アイドルはそんなにヒマじゃないだろう。

「スーパーコンピューターをコネで手に入れたっ！　断熱材もエアコンもないうちのボロアパートはそろそろ寒いのでこいつの異常な発熱量が暖房替わりになってくれないか期待www」か……。つ

か寒いって……おいおい半年以上前の記事かよ」

暦の上ではもう8月になり、日本各地では真夏日が連発している。もつとも、龍平はクーラーのガンガン効いた部屋で日がな作業しているのであまりそんな感覚はなかったが。

「ふう……めぼしい情報はなんにもなし、か。チート野郎、捕まればいいな……」

いるのかどうか分からない、状況証拠から生まれた違法行為者に想いを馳せながら龍平は椅子から立ち上がり、眠気覚ましの熱いシヤワーを浴びようと風呂場へ向かった。

早朝。ファントムペインこと五十嵐龍平は徹夜の捜査による眠気でうとうとしながらもどうにか朝食を採った。今日は世間一般ではお盆と呼ばれる休日だったが、SEである龍平にとっては人の少なくなる時期にこそ仕事が入る。社内サーバの点検や調整は利用者がいては百害あつて一利なしなのだ。

「ふあ……ねむう……」

泥のようなぬるい珈琲を気付けにすすりながら朝のニュースをぼんやりと眺める。どこぞの政治家が汚職したとか、ウワサの芸能人カップルが破局したとか、イマドキ女子の独りスイーツだとか。どうでもいい情報が脳に蓄積されることなく素通りしていく。

「うん……日本は今日も平和だ……」

などと呆けたセリフを吐き、そろそろ着替えようかと珈琲をぐいっと飲み干した時だった。

【熱帯夜にご注意！ 夜でも忘れずに水分補給を！】

そんなテロップが出て、寿退社の決まった女子アナが「みなさんも気をつけてくださいね」と脳天気警告した。

いつもなら全く気にかけない、日常の風景だ。しかし今、龍平は体中を駆け抜けた気づきの電撃に文字通り絶句した。

不自然な死を遂げた高レベルのアバター／断熱材もエアコンもない粗末なアパート／スーパーコンピューターⅡ異常な発熱／熱帯夜

「熱中症か……っ！」

パズルのピースがぱちりと噛みあって、真実らしきものが龍平の中に浮かび上がった。

不正行為などなかった。アルビレオは単純に無抵抗でタコ殴りにされ、殺されたのだ。抵抗をするはずのプレイヤーは熱帯夜とスーパーコンピューターの発する熱で熱中症にかかりゲームどころではなかったというだけで。アルビレオはおそらく自動回復のスキルを発現させていなかっただろうから、時間さえかければ低レベルプレイヤーでも殺害可能。

「なんだよそれ……そんなのありかよ」

寒いぐらいクーラーのガンガン効いた部屋でログインしていた龍平には想像もつかなかった。熱くてぶっ倒れたなんて、寝耳に水もいいところだ。

「あー……リアルで死人が出る前に運営に言ったほうがいいのか？でもアカウントから住所とか特定できねえよな……」

せめて大事に至っていないことを祈りながら、龍平は警察に電話するべきか運営にメールするかで悩み始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2938y/>

電腦探偵ファントムペイン

2011年11月12日12時13分発行